A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

75

阿川弘之
庄野潤三
有吉佐和子

中央公論社

日本の文学　75

©1969

阿川弘之
庄野潤三
有吉佐和子

昭和44年2月24日初版発行
昭和49年2月15日6版発行

発行者　高梨　茂

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　株式会社トーブロ
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　文京紙器株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

阿川弘之
霊三題 7
雲の墓標 14
夜の波音 138
古いトランク 157

庄野潤三
プールサイド小景 171
相客 188
イタリア風 199

静物 224
薪小屋 263
鳥 272
冬枯 308
丘の明り 315
有吉佐和子
紀ノ川 331
注解 503
解説 514 奥野健男
年譜 530

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

口絵

「雲の墓標」　近藤弘明

挿画

「雲の墓標」「夜の波音」「古いトランク」　近藤弘明

「プールサイド小景」「イタリア風」「静物」「鳥」「丘の明り」　安西啓明

「紀ノ川」　北喜久子

阿川弘之

霊三題

看護婦の幽霊

病院に幽霊が出るという話を聞いたのは、昨年の秋、十一月の末か十二月の初めか、もっと先だったか今ははっきりしない。

武漢は天候に恵まれると長い美しい秋がつづく。日本が雪に見舞われる季節が来ても、暖かい冬にはいつまでも秋らしい陽が射した。

その日わたしは用事を一つ持って、ひとり司令部から一里ばかりの道を漢口海軍病院へ訪ねた。道には焼栗や、壺で焼く芋の匂いが流れていた。病院にはクラスの風野が終戦後、警備指揮官として泊りこんでいる。親しい歯科医の丸山中尉もいる。きょうは老酒でも買って飲もう、そう思うと楽しかった。終戦後日かずもたち、わたしたちが軍服で町を歩いても一向不安はなかった、われわれ自身の気持も、いつかもうのびのびして来ていた。

用事が済み三人揃うと、今夜はまあゆっくりして泊ってゆけよ、ということになり、早速夜の計画をめぐらした。丸山君は技工の仕事が少し残っているというので、風野とわたしとが、古新聞と風呂敷をさげて買出しに出かけた。私は「公用」という腕章を巻き、風野は赤十字を巻く、こうしておけばまずどこを歩いてもいいのだ。近くに花楼街という生粋の支那町がある。わたしが戦争中も漢口で一番好きだった通りだ。昔の浅草の仲店通りにでも例えれば例えられようが、もちろんずいぶん趣はちがう。狭いでこぼこの石畳道に、ところ狭く並んだ露店商人。煙草屋、焼栗屋がいる、麺の立ち食い、水餃子、駄菓子屋がある、野菜、豚肉、果物、魚、米、砂糖。それらの呼び声は、洋車曳きの「オ、オ、オ」という奇妙な掛け声にまざる。露店の一列うしろには老舗が軒を列ね、三階の窓からは赤いけばけばしい幟が金色の文字を染めだして、人の頭の上へ垂れさがって来ている。武漢著名の湯包子の古い店がある。銀楼がある。井籠から熱い湯気をぽっぽと吹かしながら肉饅頭を作っている店、そういう店からは、「喂、両椀、肉絲麺」「一千四百五」などという節をつけた声が、箸をがちゃがちゃ汚れた布巾で拭く音と一緒に流れる。毛皮屋がある。酒号がある。宝石商がある。何度通ってもこのごみごみした通りに倦

きることはない。

一往復するうちには、*高粱汾酒の瓶や、*けつ魚や豆腐が揃った。風野は酒号の主人から医者と間違えられ眼の治療をたのまれて困ったりした。二人はしゃべりながら病院へ引きかえした。

丸山中尉の希望で、歯科の看護婦を二人招んでやることになり、彼女たちは大喜びで、ねぎを洗い、けつ魚を料理した。

「軍医長には内緒だよ」

「はい、わかっています」

内緒なのでよけい楽しいらしい、いそいそと働いた、けつ魚はあの濁った揚子江に棲む魚とは思えない、すきとおる美しい白身を持っていて、刺身や水たきにするとすばらしい淡い味がした。ほかの所は知らないが、華中の長江沿岸では非常に珍重される。もっとも刺身にしたりして生で食うと長江瘤という病気になることがある。身体のどこかにひょっこり瘤ができ、それがだんだん身体中を移動して行って、足や手や頭の先から消えてしまう妙な病気だ。

六階の風野の部屋で煮たきの用意ができた。けつ魚の骨つきの切身は湯の中で透明な色を白く変じてゆく。汾酒は水のようにすきとおった強い酒で、日本の焼酎に似ている。風野は飲めないから主にわたしと丸山君とが盃をかさねた。快く酔いが廻って来るころには、碼頭の時計台の鐘が冴えて、病院の中はひっそりと、物音もしなくなった。遠い下の方から夜更けの*油条売りの声や馬車の鈴が時たま響くだけであった。

「あまり遅くなると、またうるさい。お前たちはもう寝てくれ」

丸山君が看護婦たちにいうと二人は顔を見合わせていたが、

「でも六階の階段が」と口ごもった。

「いけない、その話はしないでくれ」

丸山君は烈しく頭を振った。

「こんばん、あたしは一時から夜直なんです」

「いけない、その話は絶対にいけない。気にするとよけいいけない、俺が送ってゆくから走ってかえれ」

顔色が変っていた。風野を見ると風野も困った顔をしている。私は初め何の話かわからなかったが、看護婦たちがひきとってから二人に聞くと、

「じゃあ話しましょう、ひろめないで下さい」

と言って、丸山君は真顔になって話しだした。富永シズの幽霊が出るというのだ。

終戦後二ヵ月ばかりして富永シズという外科の看護婦が急性肺炎で死んだ。表向きは急性肺炎だったが、実際はほかの病気であったらしい。軍医長のU中佐はとかく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

評判のある人で、気に入らぬ看護婦にはひどくつらくあたった。富永の時も、
「勝手にこんな厄介な病気になりやがって」
と病人の枕もとでどなり散らし、ろくな治療もしてやらなかったということである。富永は、
「早く内地が見たい、内地が、内地が……」
と苦しい息の下でいいながら死んだ。「軍医長が殺したようなもんだ」と受けのよかった富永のために憤慨する者が多かった。これは少し後の話だが、小山という軍医長の気に入りの、少し気に入り過ぎの看護婦が腸チフスで重態だった時、軍医長の世話のやきようは非常なものだった。快方に向うと眼をほそめて病人の顔を覗きこみ、
「これ、お嬢ちゃん、何か欲しいものはないか。小豆が食べたいか、小豆はまだいけないね」という調子で、吝嗇のくせ何やかや買って来て食べさせたり、「見ちゃおれんたい」と下士官たちは悪口を言った。
ある晩、風野は夜おそく裏階段を昇っていた。そのころ漢口は電燈がともらず、昼でもうす暗い、急な病院の裏階段は全くの闇で、馴れた者が手探りで、憶えた段数をかぞえながら昇れるだけであった。六階まで来て、さて部屋の方へ曲ろうとすると、反対の方から急に、サワサワサワと衣ずれの音がして何やら白いものがすっと近づき、トンと肩にぶつかった。はっと思った時にはもう白いものは消えるように闇の階段を降って行ってしまった。彼は冷水を浴びたようになり、走って丸山中尉の部屋へ飛び込んだ。ちょうど下士官や兵が四、五人来ていて、蠟燭の火で談笑していたので、それを見るとほっとした。顔色は青ざめて脂汗が出ていた。
それから二日して今度は丸山君がやられた。巡検の前に裏階段を昇って来ると、やはり六階の踊り場で、向うからサワサワサワと女の気配が近づきトンと肩にぶつかって、すっと下に消えようとした。
「誰だ」
丸山君は気を強くしてきいた。
「すみません」
という微かな声を聞いたようでもあり、空耳のようでもあったという。風野、丸山の二人は、噂になるのを防ぐため一切黙っていることにした。ところがそれから一週間ばかりすると、誰からともなく、富永の幽霊が出るという噂が病院の中にこっそりひろまり始めた。訊してみると、巡検に廻る時、何度ともしてもランプの火が消え、三度目に消えた時、ランプの前を白い女がすうっと通った、顔は暗くてわからなかったが、姿は確かに富永だったという医務科の下士官があり、また富永が生前していたように、「検温用意」という声が病室から病室へ

伝わって、影のように幻のように富永が通るのを見たという患者は一人ではなかった。だまっていられなくなって風野と丸山君とは自分たちの経験も話した。
「ひろめまいと思うのですが、もうみんな知ってしまって、夜直の看護婦なんか可哀そうなほどおびえています」
丸山君はそう言った。
「どうも少し変だね、もう少し調べてみたら正体がわかるんじゃないか」
わたしはそうは言ったが、背すじが少し寒かった。
「しかしですね、これだけ複雑な事情のある病院で、医者らしくもないですが、こういうことがあるのはむしろあたりまえな気がわたしはするんです。病院船なんかきまって一つや二つはこういう怪談があるんです。後部のどっち側のラッタルは夜は通らない方がいいなんていうのが必ずあるんです」
「俺はね」風野は言った。「とにかく生きている時これだけいろいろ込み入った精神的な働きをする人間がだね、死んでからも何かの形でたましいの活動を現わすということはあたりまえのことだと思うよ」
それからいろいろ怪談がはずんだ。
「今夜寝られるかい」
などとお互いに言いながら自分の体験や、聞いた話をしゃべり合った。碼頭の時計台が、ガンゴンガンゴンと二時を打ったのを聞いてようやく寝ることにしたが、一人で便所に行くのは、風野が真剣になってとめた。三人はこわごわ手を取り合わんばかりにして揃って小用を足した。わたしも夜半に富永が出て来そうな気がして恐いやらへんに面白いやらだったが朝まで別に夢も見なかった。十二月の二十四日が富永の四十九日にあたり、僧籍に在る者が供養をしたら、それから幽霊は出なくなったという話だ。看護婦らは自分たちで作った「還らぬ白椿」という歌を、ヴァイオリンの弾ける運転手に作曲してもらって、集まっては歌い、涙ぐんだ。富永の幽霊のことは、そのうち司令部にも伝わり、司令官の耳にも入った。司令官の耳に入った経路には大分わたしのせいがある。どちらかというと科学者風の智将型のS中将は、幕僚室で食事中その話を聞くと、
「馬鹿な」
と言って一笑に附したということであった。その後当分幽霊の正体について取沙汰され、ちょうど当時入院していた海軍の慰安婦三人のうち、誰かが夜ごとに六階の士官病棟へ忍んで通っていたのではないかという説は一番もっともらしい説明だったが、確かめる機会もなかった。
二月の初旬、風野もわたしも、富永の英霊も、漢口を

発って江を下った。上海で一ヵ月過ごし、三月末にわたしと風野とは博多に上陸、復員した。富永の霊も、もう上海から病院船で送られて郷里に帰ったにちがいない。丸山君は部下をU軍医中佐に預けて先へ帰る気持になれないと言ってまだ漢口に残っている。

夢枕

同じ漢口でのことである。富永の幽霊とは全く関係のない話。

広島市が原子爆弾にやられた報らせが入り、日ならずして被害の詳細がわかった。わたしの父母は広島にいた。老人で身体の動きも不自由だし、その安否に関してはわたしは絶望した。間もなく終戦になった。その後ライフなど見る機会があり、父母の死は信ずるほかなかった。ただわたしは、こちらでもいつも心にかかり、向うではなおさら日に日にわたしのことを案じていただろう父母が、爆発の瞬間、熔けるように死んだとしても、わたしの夢枕くらいには立ってくれそうなものだと、物足りなくもあり、ちょっと不思議な気がした。やはりそういうことはないものかと思うと寂しかった。しかしまた時には、夢枕ということは、お互いの心がこんなに通っている場合には必ずあるはずだと、妙に迷信めいた強い気持を持ち、そうとするとあるいは父母が生きているのかも知れぬと思ったりした。

対岸の武昌の、低い山並みに、白い月の出た夕方、ポ*ンツウンの上に立って、うすら寒い江の流れに釣する人を見ている時、昔別府の温泉宿で親子三人くつろぎながら瀬戸内海の魚を食べた情景をありありと思い出したりすると、たまらなく寂しかった。

そういう晩、一度わたしは、死んだものなら今夜是非わたしの夢枕に現われて下さいと、一生懸命念じながら寝たことがある。それでも父母は夢枕に立たなかった。

三月の末、復員して帰ってみると父母は広島に生きていた。母が軽い火傷をしただけであった。わたしはそれから夢枕というものを、逆な意味から信じる気持が強くなった。

ある日

四月の初め、わたしは東京へ来た。しばらく職さがしで走り廻っていたが、ある日、気になっていた靖国神社へお参りに行った。別に信心のほうではないが、靖国神社へ参るのだけは義務のような気がしていた。

木が切り倒され、掃除が行き届かず、焼けあとの一部のようにがらがらした境内は、横の口から入ったせいも

あるが、わたしをしっとりした気持にさせなかった。二の鳥居の所で、警衛のアメリカ兵が一人、退屈そうに銃の先でいたずらをしている。人影といっては、田舎者めく参拝者が、ぽつぽつ行き返りするだけだった。拝殿はいつか昇殿参拝が自由になっている。靴を脱いできざはしを上った。盗まれやしないかとちょっと気になった。東京へ着いて二、三日のうちに、洋傘だのオオバアだの次々といろいろな物を、かっぱらわれたり盗まれたりしてこりていた。

眼をつむって手を合わせる。正面の本殿の中央に大きな丸い鏡が据えてある。ここにはずいぶん大勢の友人たちがねむっているのだ。その人たちの面影を一つ一つ追おうと思ったが、できなかった。しばらく眼をつむって合掌していたが、落ちつけなくなって眼を開けた。本殿の青く銹びた銅の屋根瓦に眩しく陽が照りかえし、太いかつお木の影が落ちていた。風が吹いて来る。わたしは立ち上った。いつ来たのか、わたしの斜めうしろで十六、七の中学生らしい子が、ひざまずいて一心に祈っていた。眉根を少しよせて、真剣な顔をしていた。

境内を出、市ヶ谷から省線電車に乗ったら、急にさみしくなって来た。死んだ人々のことをいろいろと思い出した。富永シズのことも思い出した。となりの人が吊革にさがって、新聞を読んでいる。「米よこせ」「天皇に会わせろ」「デモ」「アカハタの歌を高唱し」などという字が見える。霊というものは静かなものだと思った。幾十万の霊は、雲も呼ばず、嵐も起さず静かにねむっている。サイパンで死んだ佐々木、クエゼリンで死んだ寺田、航空母艦で死んだ貝塚、みんなもう飢えることもないのだ、霊が何もしないこんな静かなものなら、それだけでも、わたしたちは生命をもっともっと大切にすべきだと思った。

いろいろなことを考えていると、腹立たしくやるせなくなって来た。電車が、東中野を出る時、ぐいと揺れる、うしろの人にぐらりともたれかかった。うしろからは不平そうにぐいと押しかえして来た。空腹でいらいらして腹をたてているのが押しようでわかる。ふり向いてみると、二十くらいの女生徒だった。眼を伏せて、ふてくされたような黄色い顔をしている。その顔がひどくみにくく、わざとわたしを意識しないふりをしているので、平手打ちを食わせてやりたいような衝動を感じた。

荻窪で下りて家へ帰ると、先ごろ葉書を出しておいた広島高等学校時代の大浜という友人から来た手紙が、夕食の卓の上にのせてあった。文中に光風さんとあるのは、高等学校の時の恩師、中島光風先生のことである。傷ましいはいでるべるひというのはむろん広島の町のことであろう。

生命だけは大丈夫だろうと思いながらいつ帰って来ることかと思い続けていたが嬉しい葉書にこのごろにない心のゆるみを覚えた　僕らの傷ましいはいでるべるひをさまよい続けた日々に心に抱いたさまざまな志向をもう語るべき人もない
松井五郎もどうしているかわからない　光風さんは二人の幼子を残して奥さんの後を追って広島で死んだ　暗たん以上である　かつて師弟の愛情というものが恋愛以上のものだと僕に言ったのは君であった　僕はすべてを喪失した　去年の秋復員して今京大に残っているが一回も講義に出たことがない
大学にはシミばかり充満している　ここではすべての古典が殺され模型化されすべての新しい文学が蔑視されている　学者は無反省だし学生は低脳だ　僕は軍隊にいた時より孤独で寂寥だ
放浪が続いている　来る日も来る日も巷塵にまみれ
僕の細いオトガイはいよいよホソ
あれほどなつかしんだ大和の風景ももう僕の心を弾奏させない
一度逢いたいが東京へ行く元気はないし君も来る暇はないのだろう
長い手紙を書くつもりで書き始めたが何を書いたらいいのかうるさくなってしまった　また心落ちついた夜にでも改めて

たまきはる生命果てずして秋近きこの朝あけを帰り来にけり

所は奈良の丹波市になっていた。その晩わたしはすっかり憂鬱になってしまい、早く寝た。

雲の墓標

大竹海兵団

昭和十八年十二月十二日

今日は入団後はじめての日曜日で、日課は身の廻り整理。わずかに晏如の心を得て日記をつけはじめる。

一昨日午前十一時五十分大竹駅下車、海兵団に到着して、午後身体検査。合格。「B」。飛行適を申しわたされ、自分の進むべき道はすでに定まった。学生服を脱いで、ジョンビラと称する水兵服を着、かぶりにくい水兵帽を頭にいただき、純白の作業衣も支給された。夜ははじめてハンモックを吊ることを教えられ、衣服をたたんで枕にすることをおぼえ、また初めて海軍の夕食を食った。軍隊で寝た最初の夜あけは寒かった。

四日まえの晩、大勢の肉親知友に送られて、ごったがえす大阪駅頭をたって来たことは、すでに半年も一年も、あるいは三年もまえのことのように、双眼鏡を逆にのぞいたように、はるかに遠く感ぜられてならない。海軍の生活が地獄であるか極楽であるかは、まだ自分にはわからないが、分隊長から「娑婆」という言葉を聞かされた時には、自分がいま、住み馴れた自分の天地から、はっきり疎隔した別の世界に移って来たことを、強く感じさせられた。もとよりそれは覚悟のまえであるが、自分の心は、積極的にすべてに打ち向って行こうとして四肢にみなぎる勇気をおぼえて猛烈にふくれ上るかと思うと、また、奈落へ突きおとされるような淋しさと焦躁とで、風船のように萎んでしまう。のこして来た学業への未練、父母への思慕、多くのなつかしい人々への気持、それが十重二十重に自分にからみつき、自分を幾つにも引き裂くのである。しかし、自分たちにはもはや、なにものかを選ぶということはできない。定められた運命の下に、自分を鍛えることだけが、われわれに残された道だ。

海軍では、バケツがチン・ケースで、雑巾が内舷マッチで、盥はオシタップで、風呂はバスで、僕、君、ネ、殿、厳禁。あやまって口に出せば、教班長から牛殺しという額をこづく刑罰を一つずつもらう。いかなる些細なことも、このあたらしい社会の言葉と秩序とにしたがって、自分を習熟させ成長させてゆかねばならぬ。

ただ、この海兵団ではわれわれ学徒出身兵は、それぞれ出身学校別に分隊が分けられていて、早稲田の分隊、東大の分隊、中央大学の分隊、広島高師の分隊、そして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo